



市民活動の世代交代

認定 NPO 法人杜の伝言板ゆるる顧問
大久保 朝江

1997年6月より21年間、みやぎのボランティア・市民活動情報誌「月刊杜の伝言板ゆるる」を発行してきましたが、のVol.250号で「卒刊」しました。私はその発行団体の代表理事をしてきましたが、この5月末をもって退任しました。今回は体験から、24年間にわたって活動してきたNPOの世代交代について記したいと思います。

情報誌の発行部数は9000部、配布・配架先は350ヶ所。発行にかかる経費は、年間で約260万円です。それに対して収入は、広告を入れて100万ちょっと。全くの赤字の事業です。企業ならとうの昔に廃刊しているでしょう。ではなぜ毎年赤字を出しながらも発行してきたか。それは、日頃は脚光をあびることなくコツコツと困った人々を支えている市民活動団体を情報誌で紹介することで、多くの市民に地域の課題を知らせ、それに市民が寄り添った活動をしている存在を知らせることをミッションとして立ち上がった団体だからです。

しかし、ここまで発行責任者として頑張ってきたものの、60代後半から世代交代を真剣に考え始めると、この月刊情報誌の発行を引き継ぐには高いハードルがあることを痛感しました。そこで、創刊から関わってきた者として廃刊を決意。「廃刊」は寂しいので「卒刊」として2018年3月、切りの良い250号で終止符を打ちました。これが世代交代への始まりです。

法人事務局の実務の担い手として託せる人材を理事に入れようと奔走しながら徐々に体制を整え、やっと次代を引き継ぎたい、信頼できる人に出会い、5月末日で代表理事を退任できました。現理事の面々は、主に40代。新しい風を吹かせてくれることでしょう。

実は、私にとって世代交代の経験は2回目です。1度目は、せんだい杜の子ども劇場の前身団体である「仙台青葉の杜子ども劇場」でのこと。運営委員を2年間やった後、1993年から3年間運営委員

長を担いました。子どもが高学年になったこともあり、当時、ブロック長をしていた遠谷幸恵さん（現法人前副代表理事）に託しました。その後、せんだい中央子ども劇場と泉子ども劇場の3団体が統合し、「せんだい杜の子ども劇場21」となり、2006年4月に法人化して「特定非営利活動法人せんだい杜の子ども劇場」となったことは皆さんご承知のことと思います。

この経験から改めて、組織の長として活動していくことは正に企業の社長のごとく社会の風を読み、それに対応する情報とミッションにブレない事業開拓にあると思います。NPOといえども経営者であり、人を共感でつなぎ、目指す課題解決に取り組むことが求められます。そのためにはアンテナを高くし、変化が激しい社会の流れを読み、学び続けなければなりません。それには結構エネルギーが必要です。だからこそ、今年72歳になる私にとって世代交代は必然でした。

振り返れば、子ども劇場の舞台を瞬きもせずジッと見入っていた息子も今年で34歳。子ども劇場でたくさんの生の舞台を見たせいかミュージカルに魅了され、遠いロンドンまで観劇に行っています。（今はCOVID-19の関係でいけません）

「子どもに夢を！たくましく豊かな創造性を！」を掲げて例会を運営していたところが懐かしい！あの舞台に夢中でキラキラした子どもの目は、今でも忘れません。

今後も生の舞台を見られる機会を作り出すことを切に願っています。

